

前略

そちらの世界はどんなですか？ きつとあなたは、そちらから私のいろいろを覗き見ているだろうだから、最近の私の身に起きたことを説明する必要はないのかもしれませんが。

突然のことに驚いています。けれど、あの子はもっと驚いているかもしれない。あるいは、私に腹を立てているかもしれないし、私から離れられてホッとしているかもしれない。私があなたと離れたときと同じように。

あの子と話したいことはたくさんあります。けれど、あの子と会ってはいけなと言われているからそれは叶いません。あの子のことを考えると私の心は鬱々としていきます。

どんよりとした心を落ち着かせるにはどうしたものかと考えた末、こうしてボールペンを握り、あなたに宛てて手紙を書き始めた、そんなわけです。部屋の明かりは落とし、机のライトだけが手元を照らしています。便箋から十センチほど離れた右隣には、氷を浮かべたウイスキーの、背が低くて胴の太いグラスが置かれています。

あなたが、いつ、どんな形でこの手紙を読むのかはわかりません。もしかすると、あなたに宛てたこの手紙が、あなた以外の誰かに読まれてしまう可能性だってあります。それは不本意なことだけれど、四十三年間生きてきて知ったことは、世界のほとんどは予測不能なことで成り立っているということです。世界などというと大げさに聞こえるかもしれないけれど、社会というにはそこは広く、世間だとちょっと下世話な感じになってしま

います。なので、とりあえず世界という大仰な言葉を使います。世界は予測不可能なことで溢れているという事実が私たちの生に彩りを与えることも確かだけれど、同時に世界の予測不能性は、ときに私たちの生から色を奪うこともあるのです。

表現が少し仰々しくなっていました。お酒のせいです。

脈絡もなくただらと書いてみたものの、そもそもこの手紙があなたのもとへ届くことはないのです。けれど、書かずにはいられないのです。あなたがそばにいますとき、私はあ

なたなどほとんど存在しないかのように振舞っていたのに、自分の身に困ったことが起きた途端、あなたを頼りにしているのです。勝手だなど自分でも思います。

気づいているかもしれないけれど、私は今、気持ちがあっちにいたりこっちにきたり忙しく、心のちょうど良い場所に収まっていることがほとんどありません。もしかしたら、手紙を書いている最中に気持ちがあちでもないところへ行ってしまうって、あなたを不快にしたり不安を感じさせてしまうかもしれません。なるべく自分の真ん中に気持ちがあるときに書くつもりでいるけれど、もし読みにくいと思ったり嫌な予感がしたときは、どうか読むのをやめてください。

あの子がいなくなってから、私の日常は彩りを失いました。精神面でのことではなく、文字通り風景が違って見えるのです。フェードをかけたような、水で色を薄めたような、すべてに霧のかかったような、あらゆるものが灰をかぶったような、モノクロのような。世界がすっかりくすんでしまったのです。

ああ、世界は随分と彩り豊かにできていたのだなあと、ちょっと前までの私が生きていた世界を思い出して感心するのです。そう。世界はたくさんの色で溢れているのです。あの子が私のもとからいなくなるなどということにならなければ、ひよっとすると私は、世界の色彩の豊かさに気づくことなく一生を終えていたのかもしれない。あの子がいなくなって私はひどく落ち込んでいるけれど、世界の美しさを私に気づかせてくれたことに関しては、あの子に感謝しなければなりません。

背の低いグラスがぐっしょりと汗をかいています。新しいお酒を作ってから続きを書きます。

*

あの夏の日、夕暮れ時に突然降り出した豪雨の音を聞きながら、夕飯を作り娘の帰りを待っていた。夏休みが始まって最初の木曜日だったその日、娘は補習を受けるためにお昼過ぎから中学校へ出かけていた。このところ、毎日のように激しい夕立がある。ほんの一时间もすれば止むのだが、自転車で学校へ向かった娘がびしょ濡れになっていないか、どこかで雨宿りでもしながら途方に暮れているのではないか。降り出してからだいたいぶ経つのにちっとも止む気配を見せない夕立は、私の心を不安にさせた。外が薄暗いせいなのか心

配がそうさせるのか、時間の感覚が曖昧で、夜の七時をとくに過ぎたように感じたが、時計を見るとまだ五時半を少し回ったところだった。

娘はスマートフォンを欲しがっていた。実際、中学生になると同時にスマートフォンを持たせる親も少なくないようだったが、LINEでのいじめトラブルやSNSで犯罪に巻き込まれたといった話を耳にしていたこともあり、娘にはスマートフォンを与えていなかった。普段はまったく不便を感じていなかったものの、こういうことがあるのならば、せめて携帯電話くらいは持たせておけばよかったと少し後悔した。

そんなことを考えながら、野菜と肉の煮込みの具合を見て鍋の火を止めた。テーブルを拭きランチョンマットを敷き、皿や箸を並べ、娘の帰りを待った。六時になって戻らないようなら中学校へ電話をかけよう。もし、まだ娘が中学校にいるなら、車で迎えに行こう。過保護と思われるだろうか。

五時五十三分。スマートフォンが鳴った。ディスプレイに表示されている数字は、市内の市外局番で始まっていたが、覚えのないものだった。普段は知らない番号からの着信は無視するものの、娘の顔が頭をよぎり、三コールで電話に出た。

「榎本優佳さんのお母さんでお間違いないでしょうか？」

穏やかな声の、物腰の低い男が丁寧な口調で言った。聞いたことのない声だった。娘の名前が出たことは私を安堵させたものの、それはほんのわずかなことで、予感はずぐに悪いものへと変わった。

娘の身に何かあったのだ。そして、それはおそらく、良くない何かだ。

男の優しく控えめな口調は、心から自然に湧いて出ているようにも聞こえるのだが、一方で、まるで、そういう悪い何かを伝えることに慣れているような、あるいは、悪い何かを知らされた人間が受ける衝撃を和らげるための訓練を受けたもののようなようだった。

「はい。優佳の母です」

答えると、電話の声は、先ほどよりもより丁寧で、穏やかな声で告げた。

「突然のお電話で驚かせてしまい、申し訳ありません。私、児童相談所の橘たちばなと申します」

ジドウソウダンジヨ?

テレビのニュースでしか聞いたことのないその響きに、私の思考は像を結ばなかった。

じどうそうだんじょ？

返す言葉が見当たらず、私はただ、男が話すのを聞いた。

「優佳さんがお戻りにならないことをご心配されていることと思いますが、今、私たちと一緒におりますのでその点はご安心ください。はい。ご連絡が遅くなってしまい、申し訳ございません。はい」

男は、自分に言い聞かせるような相槌を打ちながら話した。

「優佳は、勉強を教えてもらいに学校へ行っているんです」

自分の声が、ひどく遠くから聞こえるようだった。

娘は、小学校三年生の頃からお腹の調子を崩すようになった。それまでは、こつてりとしたラーメンやぎとぎとした肉を好んで食べる子どもだったが、小学三年生あたりから、そうした重いものを食べるとお腹を下すようになった。学年が進むにつれ、料理の種類に関係なく、ものを食べると軽い腹痛と下痢に見舞われるようになっていった。中学へ入学すると、その不調は一気に加速した。原因不明の腹痛は激しさを増し、便は、もはや軟便を通り越し、水のような液体となって流れ出た。不意に訪れる腹痛と下痢に、トイレへこもる時間が増えた。当初は、学校へ行きたくないのではないかと思っていたが、腹痛は朝に限らず夕方も夜も夜中も、時間を選ばずやってきた。生活のリズムが乱れ、体力が落ちた。通学中に便意を催したらという不安のため、中学校までのおよそ二キロの道のりを歩くことが困難となった。毎朝、車で中学校へ送り届けるも、一時間目の途中ほどで腹痛に見舞われた。保健室のベッドで休み、学校から電話を受けた私が昼前に迎えに行くと、この生活が二週間ほど続いた。

四月の中頃、小学校の頃から診てもらっている小児科医に相談すると、その女の医師は、過敏性腸症候群にしては症状が重いことから、潰瘍性大腸炎かクローン病という難病の疑いがあると言った。後日、医師から、大学病院の小児消化器内科への紹介状を渡された。

大学病院へ行くと、流れるように診察と検査の日取りが決まり、五月の半ばには、胃カメラと大腸カメラの検査を受けた。一週間後の診察で、医師は、内科的な異常は見当たらないと言った。難病でなかったことにほっとしたが、腹痛の原因がわからないことに関しては、私たちだけでなく医師も困ったような様子だった。

「とにかく、疑いをひとつずつ潰していき、原因を突き止めますよ」

医師は娘と私を交互に見つめると、瞳に力を込めて言った。

大学病院での心強い言葉とは裏腹に、娘の具合は日に日に悪くなり、下腹部の激痛と水のような下痢とで、次第にやつれていった。学校へは通うものの、保健室で大半の時間を過ごし、給食の前に早退するという日々が続いた。その頃、私は無職だったこともあり、時間のほとんどを娘のために使うことができた。娘の具合が悪くなると蒸したタオルを作りお腹に当て、トイレに座る娘のお腹をさすり続けた。昼夜を問わずの看病に、小さな疲労が少しずつ溜まっていくのを感じていた。私は、おそらく疲れた顔をしていた。娘はそれを感じ取ったのだろう。夜中に私を起こすことはなくなり、ひとりで痛みを耐えるようになった。娘が起き出してトイレへ行く気配を感じながら、私は看病することを放棄し、寝たふりをした。

梅雨入りする頃には、娘も私もすっかり疲れ果てていた。中学校は遅刻と早退が当たり前となり、休日はどこへも出かけず家で過ごした。友達を家に呼んで遊んだり、休日は遠出したりという私と娘の日常は、すっかり様変わりした。それでも娘は、学校の保健室で出会った友達や先輩のことを楽しそうに話し、場を明るくしようと振る舞った。けれども、私の精神はすっかり余裕をなくしていた。何をしても状態が良くならない事実は私の感情を逆なでし、私の作った食事でお腹を痛ませるのにも苛立ちを覚えた。トイレにこもり痛みを悶える娘に対し、憎しみを抱くようになっていた。理不尽なことだとわかっていて。私に生じる負の感情を娘にぶつけるのはまちがっている。わかっているのに自分が制御できなかった。

「こんなになるなら、生まれてこなければよかったね」

「優佳がお腹の中にいるときに、ママがタバコをやめなかったせいかなあ。だとしたら、一生治らないかもね、優佳のお腹。かわいそうに」

娘の身体が口にしたものを異物と見做してお腹を下しすべてを排出するように、私にとって娘の存在が異物となったようだった。娘の言動や声は、私の精神を刺激した。娘が排泄物をいつまでも出し続けるように、私もまた、悪意にまみれた言葉を吐き続けた。

アスファルトから立ち上る夏の匂いを感じ始める頃になると、娘への憎しみはなくなった。代わりに、娘の存在を無視するようになった。台所に立つ私の横にきて、最近夢中になっているYouTube動画やボーカロイドの話にしても、「ふーん」と空の返事を返すだ

けで、ときには反応を返さないこともあった。娘に愛情を注ぐことが、どんどん困難になっていった。

ある日、遅刻登校した娘が、「ママが怖い」と保健の教諭の前で泣いた。

「何が怖いのかな？」

「怒ると豹変する。死ねって言われる。最近は、全然話してくれない。ママじゃないみたいになっちゃった。帰りたくない」

いったん流れ出した娘の涙は止まらず、保健の教諭は、娘の背中を撫で続けた。

保健の教諭が娘の話したことを担任に報告すると、担任は教頭へ報告した。教頭は、虐待案件として市の児童相談所に通報をした。夏休みに入る二週間前のことだった。

児童相談所は、娘との面談を中学校で行う提案を学校側へして、学校側から娘にそのことが伝えられた。面談は、夏休みに入った最初の木曜日に設定された。

「そういうわけだね、今日、優佳さんとお話をしました。はい。児童相談所でお預かりすることもできるのですが、優佳さんのおじいさまがこれからお迎えに来てくださるということなので、はい、しばらくはね、はい、優佳さんはおじいさまの家で暮らすことになります。はい。お母さんも、優佳さんとこんな風に離れてしまうのはお辛いとは思いますが、どうか、ご了承ください」

そこに、私を責める様子はなかった。

「状況はご理解していただけたでしょうか、お母さん」

男が柔らかい口調で聞いた。

男の言葉は耳から入ってきているのに、頭はぼんやりとしていて、靄のかかったようだった。

「優佳は勉強を教えてもらいに学校へ行ったんです」

呟くように言うと、「はい、お母さん。それについては、お母さんを騙す形になってしまい申しわけありません。本当に、申し訳ないと思っています。はい」男は謝った。物腰は柔らかいが、慣れているような、台本を読んでいるような謝罪だった。きっと、男は受話器の向こうで頭を下げているのだろう。けれども、それだって、おそらくはマニュアルに書かれた仕草なのだ。そもそも、この男はどうして謝っているのだろう。

「学校で勉強を教えてもらっているんです」

私は、もう一度繰り返し返した。

*

前略

あの冬の終わりの日、私の妊娠と子の父親が既婚者であることを伝えると、あなたは祝福と感謝の言葉をかけてくれました。

「やったじゃない。おめでどうね、多佳子ちゃん！　ありがとうね、Tさん！」

それがあまりに飾り気のないまっさらな言葉のように響いたものだから、私はすっかり拍子抜けしてしまいました。私は覚悟していました。報告を聞いたあなたが取り乱し、Tをあらん限りの汚い言葉で罵り、不義の子を宿した私のお腹を力いっぱい殴って子を死なせる、そんな覚悟です。あなたのことを知らないTは、「そんなこと、起こりっこないよ。多佳ちゃんの考えすぎだよ」と言っていたけれど、果たして、Tの言った通りになったのでした。目の前で少女のように瞳を輝かせて喜ぶあなたに対して、ほんの少し申し訳なく思いました。

子を宿したことについてはさておき、不倫の末の妊娠であることについては確実に責められるだろうと思っていて、そこはTとも意見が一致していました。私たちは、説明と決意の言葉を用意していました。けれど、あなたは、私とTの不義について触れることはなく、それは都合の悪いことから目を背けているというよりも、愛し合っている二人であれば形には拘らない、というおおらかさからくるような態度のように映りました。そんなわけで、Tと一緒に考えた言い訳も決心も、ついに話すことはありませんでした。Tの妻についてあなたが触れなかったことは、冷静に考えると非情なこととも言えるけれど、それよりも、娘の私の決断を尊重してくれたことに感謝を覚えました。

Tの職業が小説家であると知ると、あなたは、Tの本を（古本でしか手に入らないものも含めて）、すべて買い揃えました。けれど、あなたは元来、読書家ではないし、読むとしても自己啓発の本か詩集の類なのでした。

「あんなに買い込んで、読まないんだよ？　積ん読もいいとこだよ」

愚痴るようにTに報告すると、「多佳ちゃんのお母さんが、そんな風に僕を認めてくれて応援してくれている、そのことだけで僕は嬉しいよ」と、整った顔をほころばせるのでした。

ある春の日の深夜十時。私たち四人は、隣町のファミリーレストランにいました。そんな

遅い時間にファミレスに入ることとなったのは、東京から訪れたTの電車の到着時間に合わせて車で迎えに行ったところ、Tがまだ夕飯を食べていないと知ったからでした。

私たち一家は、夕飯を外で済ませることはあるものの、せいぜい夜の八時には帰宅し、それ以降の時間にお店でお茶をしたり飲みに行くなどという習慣はありませんでした。なので、あれは、生まれて初めての、家族での深夜のファミレス体験でした。私たちは気分が高揚していたのか、少食のあなたは大きなbuffeを頼み、普段甘味を食べることなどない父はあんみつを注文しました。Tがハンバーグ定食を美味しそうに頬張っていたことは鮮明に覚えているのだけれど、自分が何を頼んだのかは忘れしました。あなたはとても穏やかで、Tが身振り手振りを交えてする執筆の話を、楽しそうに笑ったり驚いたような顔をしながら聞いていました。こんなに落ち着いて楽しそうなあなたを見るのは随分と久しぶりのことで、あなたの隣に座る父も、横目であなたを眺めながら目尻を垂らしていました。

私とTの入籍の話題になったとき、「ところで、お父さまとお母さまのご結婚記念日はいつなのですか？」Tが聞きました。

「あれっ？ 今日って、何日だったかしら？」
あなたがTに尋ねると、「五月二日ですよ、お母さま」Tが答えました。すると、あなたは、ハッと瞳を輝かせたのでした。

「今日だわ！ お父さんと私は三十五年前の今日、結婚したんだわ！ ねえ、そうよね、お父さん？」

あなたに見つめられた父は、首筋に手をやると、「僕は気づいていたけどね」と言って、照れを隠すようにそっぽを向きました。

その夜、あなたたちに私のアパートに送ってもらい、お風呂に入り、寝床について間もなく、お腹の中にトンと何かを感じたのでした。

「今、動いた気がする」

隣で横になるTに言うと、Tは私のお腹に手を当てました。しばらくじっと様子をおかがっていると、再びお腹が、トン、と動きました。

「ほら、動いた！」

「うん！ 僕も感じた！ すごいよ、多佳ちゃん！」
初めての胎動でした。

あなたたちの記念日のおかげで、初の胎動の日を今でも覚えています。慣れないこと付き合わせてしまったせいでしょうか。その翌日からしばらく、あなたは精神の調子を崩した

のでした。

*

娘がいなくなった次の週の金曜日、二人の男女が家にやってきた。その男女は、それぞれ児童相談所の橘と花岡と名乗り、首から提げている身分証を見せた。児童相談所の人、すなわち「兎相の人」との初の面会だった。

「お母さんも突然のことで混乱されていらっしやると思いますけど、はい、優佳さんのために、どうか私たちの質問に答えていただけないでしょうか？ はい。もちろん、現時点で、答えられる範囲でかまいません。はい。いろいろと答えたくないこともあると思いますので、ご無理はなさらないください。はい。よろしいでしょうか？」

兎相の男が聞いた。テーブルの向かいの椅子に、背筋を伸ばして座っている兎相の男の表情は穏やかで、私を責める様子は全くない。

早退する娘を迎えに行つたときに顔を合わせた保健の教諭の柔らかい笑顔や感謝の言葉が浮かび、補習の連絡で電話をかけてきた担任の明るい声が脳裏に響いた。

「優佳さんのお母さんは、服装もおしゃれだし綺麗だし若々しいし。本当に、素敵なお母さんで羨ましいです」

「お母さんの声って、本当に素敵ですよ。私もお母さんみたいな声だったら、生徒もちゃんと授業を聞いてくれたのに、って思うことがあります」

娘とは関係のないことで私をほめそやす、保健の教諭や担任の女性教諭の声や顔が浮かんだ。その顔は、徐々に醜く歪んでいった。あのとき、あの女たちは、私を虐待母として認識していた。にもかかわらず、そんなそぶりを一切見せず、むしろ私を褒めちぎった。女たちは、要は、私の機嫌を取っていたのだ。少しでも私の気分を良くして、娘への被害を抑えようとしたのか。それとも、私が恐ろしかったのか。そのときのことを思い返すと、裏切られたような馬鹿にされたような、騙されていた悔しさや苦々しさが、心の中にじわじわと広がっていった。その負の感情は、とどまるところを知らない勢いでどす黒い靄となり、私の心を侵食していった。

黙っていると、「お母さんが怖くて、甘えられなくなりました。それが辛かった。優佳さんはそう言っていたんですね。はい」兎相の男は、甘いような声で言った。

「それについて、お母さんはどう思われますか？」

「娘の訴えがすべてです」

答えると、「お母さん、ちょっといいですか？」児相の男の隣で、黙って話を聞いていた児相の女が、おもむろに口を開いた。

「優佳さんは、お母さんから死ねと言われたと言っているんです。一緒に死のうと言われたとも。醜いと罵られたり産むんじゃないと言われたとも。肉体的な虐待もあったようですよけど、これらの事実関係についてお母さんとしては――」

淡々と静かに、けれど、矢継ぎ早に話す児相の女を手で制すると、児相の男は静かに言った。

「私たちはお母さんを責めたいのではなくてですね、はい、事実関係を整理して優佳さんとお母さんの関係を良好にしたいと思っています。はい。そのために、お母さんからの話を聞きしたいんです。はい。お話していただけませんか？」

私は、二人をそれぞれまっすぐに見てから繰り返した。

「娘の訴えが、すべてです」

そう言うってから、私は、用意しておいた答えを話した。

「私の側からの事実を伝えたところで、それは娘にとって良い方向へ働かないと思います。学校の先生たちや児童相談所の人たちといった周りの大人たちが、一丸となって味方になってくれたことで、娘は少々気が大きくなって、私との間で起きたことについて、話を盛ったり小さな嘘を吐いてしまったかもしれません。けれどもそれは、娘が今まで私から受けたストレスを溜め込んだ結果であり、そうさせてしまうだけのストレスを娘に与えたのが私であることは確かなのです。話が盛られていようが細かな嘘があるうが、娘の訴えは、きっとおむね正しいのです。あるいは、もし娘の話に小さな嘘が紛れ込んでいたとして、私の側から娘との間で起きた話をしたら、きっと娘は察するでしょう。『もしかして、私の吐いた嘘、この人たちにバレたかも』と。娘は勤が働く子です。周りの大人が事実を知ったと気づいたら、いま味方でいてくれる周りの大人たちを、敵と見做してしまうでしょう。それは、娘にとって良くないことです。敵となる大人は、私ひとりで十分なのです。信頼できる大人が減るとするのは、娘にとって良くないことで、あってはならないことなのです。娘の居場所を確保するためにも。」

実際のところはわかりませんが、娘が保健室でちょっと愚痴って泣いてしまった結果お

ごとになってしまった、そういう可能性も考えられます。娘が今どう思っているのか、この状況をどう感じているのかは、わかりません。児童相談所が出てくるなんていうおおごとになって驚いているかもしれないし、自分を氣遣ってくれる味方がいっぱいできて喜んでいるかもしれない。意地を張り、後に引けなくて、困っているかもしれない。いずれにせよ、娘は、最終的には、『なんか、すごいことになっちゃった』と思うに至ると、私は思っています。そのとき、周りがことを大きく扱い大騒ぎをしていたら、肝心な娘の声が聞こえなくなってしまう。今の状況は、常識的にみたら深刻に受け止めなければならないことなのかもしれないが、私が深刻になることで、娘がより深刻になってしまったら、本末転倒です。だから私は、ことを深刻に受け止めずに静観したいと思うのです。虐待に相当するのではないのか。それは、児童相談所にとって重要かもしれませんが、客観的に虐待であったとしてもそうでないにしても、娘本人が参っているのは事実なのです。なので、娘の意向や意見を聞いてあげていただければと思っています」

一気に話すと、話を聞きながら忙しそうにペンを走らせていた児相の男が、顔を上げた。男は、満足したように口角を上げて言った。

「お母さん、心の内をお話ししてください、ありがとうございます。はい。今日はだいぶ長くなってしまってますみませんでした。はい。また、このようなお時間を設けていただくことはできませんでしょうか？」

児相の男は聞いたが、私には、もう、話すことは残っていないかった。児相の女は、何をメモしているのか、まだ紙に何かを書き付けている。

返事をせずに黙っていると、児相の男は、「今日はこの辺で失礼しますが、優佳さんの近況だけお知らせしていきますね、はい。優佳さんは、夏休み明けからおじいさまのご実家から通える中学校へ転校します」と言った。「もう一つはですね、はい」、児相の男は、娘が二週間後から、大学病院の精神科の児童思春期外来へ通うことになったと伝えた。

「お母さん、いろいろ一度にお伝えしてすみません。心配だとは思いますが、ひとつだけお願いがあります。はい。しばらく優佳さんに会わないでいただけますか。これは優佳さんのためです。はい。どうかよろしくお願いします」

児相の人は、私が出した麦茶に、最後まで口をつけることなく帰っていった。家に来てから一時間半が経っていた。私は疲れを感じ、ソファで横になり目をつむった。

その夜、風呂に入っているときだった。娘は、もう、私のもとへ戻ってこないのではないかと思ったら、それは揺るぎのない真理のような、圧倒的な力で私の心を締め付けた。その

真理は、私をとてつもない恐怖に陥れた。呼吸は正常であるはずなのに、手や足から痺れが始まり、全身へと伝わっていった。温かいお湯に浸かっているのに、全身に鳥肌が立った。頭の中から足の先まで痺れが走り、尻の穴がびりびりとした。娘が居れば厄介に思い、居なくなつた途端に寂しく思う。その感情が身体の反応として表出する。自分はどこまで我儘でナルシスティックな人間なのだろう。この痺れた身体のまま浴槽に沈んで死ねば良いのに。

昼間、私は、兎相の人の前で格好をつけていたのだった。兎相の人に話した長広舌は、娘を思う良き母親を演じるために用意した台本でしかなかった。淡々と話す予定でいたのだが、話をしていくうちに段々と自分に陶醉し、あたかも自分が本当に良き母親のような錯覚に陥っていった。話し終え、我に返り、ああまたか、と自分に吐き気を催した。

兎相の人には、嘘を見抜いてほしかった。その場で、「お母さん、きれいごとはやめてください」と言ってほしかった。偽りを見破られたら、その瞬間こそ不快に思うだろうが、同時に、ホッとすることはわかっていた。私の口から吐き出される嘘に気づいてもらえることが、どれだけ私を楽にするか、肩の荷がおろるか、そんな風に思うのだった。兎相の人は、私の嘘に気づいていて、敢えて指摘しなかったのか。それとも、あの、温かくも冷静を失わない目は、フシ穴だったのか。あの人たちは、私の話を聞いてメモを取るだけだった。「ああ、この人たちもダメだ」私は思った。自分が虚飾にまみれていることを、私は、いつまでも人のせいにし続けていた。

娘はおそらく、何ひとつ嘘は言っていない。嘘を吐いていたのは、私の方なのだった。話すことが残っていないというのも嘘だった。私は話さないのではなく話せないのだった。私が娘にしたことの数々を思い返して兎相の人に話すことは、想像するだけで、精神的な苦痛を伴った。形はまったく違うが、それはセカンドレイプに似ていた。私は、のほほんと娘に暴言を吐いていたわけではなく、自分のしていることが、娘に与える影響に自覚的だった。死んでいいよ。産むんじゃないかった。愛情とか全然ないし。お前が死んでも悲しくないから。そうした言葉が、娘にどれだけのダメージを与えるか、わかって言っていた。このままだと娘がいつか壊れると知りながら、暴言をやめられなかった。私が娘に発し続けたそうした言葉の数々を、兎相の人たちの前で再現する勇気が、私にはなかった。

*

前略

あなたが私たちの前からいなくなった一ヶ月後の秋、私は子を産みました。三千五十グラムの女の子です。本当ならば、すぐにでも親子三人での生活を始めたかったのだけれど、Tは妻と別れることができずにいて、こちらはあなたがいなくなり、私が出してしまうと父が一人になってしまうなど、いくつかの事情から、しばらくの間、Tは東京で、私は実家で暮らすことになりました。週に一度、Tが私と娘の暮らす実家へやってきて、二日か三日ほど滞在し、再び東京へ戻って行くという生活が始まりました。

子を産んで育てるということは、想定外の出来事の連続であることを、娘を産んでから知りました。笑い顔、じつと見つめる瞳、指を握る小さな手、沐浴、オムツ替え、夜泣き。産後、鬱になる人もいるようだけれど、私にとっては娘のすべてが新鮮で、困るというより幸せを感じていました。娘との時間は、愛おしくかけがえのないものでした。日々成長を見せる娘の変化が嬉しい一方で、いつまでも赤ん坊のままできてほしいとも思うのでした。

最初の頃こそ、Tの不在の日々を寂しく思ったけれど、まもなく、私の思いのほとんどは娘へ注がれるようになり、Tへの思いは目減りしていきました。娘に会う日が少ないことに加え、元来不器用なTは、父親になることができずにいました。Tのできることに言えば、せいぜい、娘のためにオリジナルの歌詞を書き、即興で節をつけ、歌い、あやす程のことだけでした。そうでなければ、娘と一緒に昼寝をしていました。そっくりな寝顔や寝姿に癒されもしたけれど、オムツ替えも沐浴もできず、ミルクすら与えられないTに、私の苛立ちは、どんどん募っていきました。

気づいたときには、Tの様々が気持ち悪くなっていました。それは、態度として出ていたようです。冷たい言葉を吐く私に、「多佳ちゃん、機嫌なおしてよ。僕だって頑張ってるんだよ。仲直りしようよ」Tは、甘い声で機嫌を取ろうとするのだけれど、その馴れたような態度に、私の苛立ちは、さらに募っていくのでした。

ある日の夕方、私は台所で夕飯を作り、Tは娘の沐浴に挑んでいました。裸ん坊の娘を抱いたTが風呂場に消えて間もなく、娘の大きな泣き声が聞こえてきました。その声と重なるように、「多佳ちゃん、どうしよう！ ゆうちゃんが大変！」Tの、慌てふためく声がしました。コンロの火を消し風呂場へ行くと、風呂の蓋の上に置いた赤ちゃん用の風呂桶の中で、石鹸まみれの娘が暴れ、今にもTの手から滑り落ちそうになっていました。私は、Tから娘を取り上げ、石鹸を流し抱きかかえると、風呂の蓋を開け、服を着たまま風呂に

入りました。腕の中で湯に浮かぶ娘の頭にお湯を掛けてひと撫ですると、娘がにっこり微笑みました。

「お風呂のひとつも入れられないとか、存在価値ないから」

お湯を含んでピタリと身体にまとわりつく服の重さを感じながら、洗い場にいるTを見上げました。ズボンを膝までたくし上げたTは呆然と立っていて、ぐったりとした瞳には、光が宿っていませんでした。

「多佳ちゃんは狂ってるよ。もういい。僕はこんな生活やめる。さよなら」

そう言うと、Tは風呂場を出て行きました。

娘をバスタオルで包み、濡れた服を着替えて居間に戻ると、Tの姿はありませんでした。いつも背負ってくる大きなリュックが消えていました。

父が二階から降りてきて、「騒がしかったようだけど、何かあったか？ あれ？ Tさんはどうした？」と聞きました。

「出て行った。たぶん戻らないと思う」

そう答えると、父は「そうか」とひとこと言って、二階へ戻って行きました。

のちに知人が教えてくれて知ったのだけれど、Tは妻のもとへ戻り、二人で小さな古本屋を始めたそうです。一度だけ、インターネットで検索をかけ、その古本屋のホームページを覗きました。古びたような、いかにも貧乏そうな佇まいのお店だったけれど、そこに映るTとその妻の笑顔は雑味がなくて、心から幸せそうにとろけていました。正直なところ、私は、Tのことを好きでいる一方で、売れない小説家であることに不満を抱いていました。貧乏な暮らしに耐えられるか、不安で仕方なかったのです。なので、Tとその妻の笑顔に、羨ましさこそ感じなかったけれど、人間としての敗北のようなものを覚えたのです。

*

兎相の人からは、十日に一度ほどのペースで電話がきた。

「お母さん、会ってお話したいのですが、お時間を作っていただけじゃないでしょうか？」

兎相の人は、電話の度にそう尋ねた。

「これからのことを決めていくに当たって、お母さんだけ蚊帳の外に置くのは良くないと思うのです。はい。ですから、面会を重ねてね、話し合いながらですね、最善の策を探していこうと考えているんです。はい。お時間作っていただけじゃないでしょうか？」

児相の人は、とても丁寧に言葉を重ねたが、私は拒み続けた。私の娘へ対する暴言や態度は、私の精神に問題があるのであり、児相の人といくら対話を重ねても、私の精神が良くなることはないと思っていた。私がすべきは、精神科に予約を入れ、診察を受け、自らの異常な人格を治療することなのだった。

会う気がないので児相の人からの電話に出たのは、娘の近況が聞けたからだだった。引越してから娘の腹痛は止まず、むしろ、悪化の一途を辿っていた。お腹の痛みは、特に深夜に激しくなり、夜の十一時から夜中の三時までトイレにこもることが日課のようになった。床に着くのが午前四時ということも、珍しくなかった。昼夜が逆転したせいで、中学校へ通えなくなった。校長が配慮してくれ、登校日数を稼ぐために、娘は、夕方から登校して、教員から個別の授業を受けた。そして、週に一度、児童思春期の外来へ通っていた。

「お母さん、繰り返すようで申し訳ないのですが、優佳さんに会うことだけはどうかしないでください。精神科にかかっているということから察していただきたいのですが、優佳さんのお腹の不調の原因はメンタルによるものではないかと考えられていて、メンタルの主たる原因は……。はい。察してくださいますよね？」

私は、自信を失っていた。自分は母親として存在する人間ではないのだと、自身が招いたことにも関わらず、気持ちが沈んでいた。誰にも相談する気が起きなかった。気持ちは落ちているのに、お腹は減った。時間はあり余っていた。時間をかけて料理を作り、食べた。絶望の淵のようなところにいるのに、台所に立ち、昼過ぎから缶ビールを飲み、のんびりと夕食の支度をした。そんな自分が滑稽で、鼻から笑いの音が出た。笑っていると、目から涙がこぼれた。笑いの涙なのか悲しみの涙なのか、よくわからなかった。娘が出て行ってから、一ヶ月を迎えようとしていた。その間、誰からもメールも電話もなかった。私には友達がないのだと知ったが、特に悲しいとは思わず、むしろ、人間関係の煩わしさが無い分、存分に自分に閉じることができた。

*

前略

T が出て行って二ヶ月ほど経った秋の日に、一歳の誕生日を迎えた娘を連れて、大学の母校へ遊びに行きました。どういうわけか、久しぶりに、指導教員の顔が見たくなったので

す。約束も取り付けずに研究室を訪れた私を、英米文学を専門とする指導教員は、温かく迎えてくれました。五十を過ぎた指導教員には二人の子がいたけれど、すでに中学生と高校生ということでした。こんなに小さな子を見るのは久しぶりだと、目尻を垂らして、少し興奮しているようでした。

「ちよつときあ、抱っこしてもいい？　こんなおじさん、汚くてイヤ？　ダメ？」

照れを隠すようにちゃらける指導教員に娘を差し出すと、「え？　いいの？」指導教員は驚きつつ、柔らかに折り曲げた腕で娘を迎えいれました。娘は、泣くこともぐずることもなく指導教員に抱かれ、おかしな顔をしてみせる目の前のおじさんに、ころころと笑いの声をあげていました。

机の向こうで指導教員に抱かれている娘は、よほど心地よかったのか、そのうち寝息をたて出しました。指導教員は、少子化の影響で大学もすっかり静まり返ってしまったことなど、寂しそうに話して聞かせました。

トントントン。

ノックの音が三回しました。

「はい。どうぞー」

娘を起こさないように気を遣ったのか、指導教員が静かな声で返事をする、ドアが開き、見知らぬ顔の男が入ってきました。昭和の文豪のような丸い縁の眼鏡をかけた、くせ毛の若い男でした。男は、指導教員が赤ん坊を抱いているのを見ると、ひよろりとした肘を曲げ、親指と人差し指を顎に当て、「隠し子ですか？」と聞きました。

「そう。実はね……。なんてこと、あるわけないでしょう」

指導教員が笑うと、昭和眼鏡の男は、「では、実の子ですか？」と聞きました。

「そうそう。僕、こう見えてまだまだ……。なわけないでしょう。卒業生の子ですよ」

二人のやりとりをぼかんと見ていると、指導教員が、「こちらW先生。去年退官したM先生の後任」と教えてくれました。のちに夫となる男との出会いです。

その日から、家事や育児の合間を見つけては、娘を連れて大学へと通うようになりました。指導教員の部屋を訪れ、帰りには、一階下のフロアにある、昭和眼鏡の男の部屋に寄るのが常となりました。そのうちに、昭和眼鏡と私はいい仲となりました。

昭和眼鏡の男は、文化人類学を専門としていて、今まで会ったことのないような、一風変わった感性の持ち主でした。

たとえば、チェ・ゲバラの半生を描いた映画を観終えて、駐車場に停めた車まで歩いてい

ると、「もし僕が、大学を辞めて革命家になると言ったら、多佳子さんはついてきてくれますか？」と真剣な様子で尋ねました。「嫌だよ。だって生活の保障がないし、ほとんどギャンブルじゃん」即答すると、「そうですか。多佳子さんがそう言うならば、僕は大学に留まります。僕の最終的な夢は、多佳子さんと優佳ちゃんを幸せにすることですから」まっすぐに瞳で言いました。

あるいは、晩酌をしているときにこんなことを言っていました。

「人間の最終目的が種の保存であるならば、眠るといふ行為こそが人間の主たる営みであり——というのも人間は睡眠の間に成長をするのだから——、日中の活動は、睡眠導入のためのものなのではないかと僕は思うのです。働いたり、疲労したり、騒いだり、喜んだり、落ち込んだりするの、すべて眠りのためのものなのではないかと思うのです。僕たちの本当の現実、夢や無意識の領域なのではないのでしょうか」

仕事やストレスだけでなく、文化や余暇という事柄までもが良質な睡眠のための営みなのだ、昭和眼鏡は、至極真面目に語るのでした。私は、昭和眼鏡のそうした、清くねじれたような発想を聞くのが好きでしたし、それについて感想を述べることも、楽しみの一つなものでした。

「幼な子とは、すなわち猫のようなものですから」

昭和眼鏡はそう言って、猫にするのと同じように娘に接しました。自分からは決して近づかず、娘が自分に興味を示すまで、辛抱強く待ちました。ある日、私が昭和眼鏡のアパートの風呂掃除から戻ると、娘が昭和眼鏡の隣にちょこんと座って、一緒にデイズニーのアニメを観ていました。ドアノブに手をかけたまま様子を観察していると、娘は、あぐらをかいた昭和眼鏡の膝に手をかけ、あぐらの中にすっぽりと収まったのでした。

昭和眼鏡は、本当にできた人でした。あの世はあるだとか霊は存在するだとか、現世での行いが死後の行方を決定するだとか、おかしなことを言うのだけれど、嘘をつくことのない、とても優しい人でした。自分への出費は極力抑え、私と娘のためならば、出し惜しみすることなく何でも買ってくれました。

ただ一つ、気になることがあるとすれば、それは容姿でした。昭和眼鏡は、不細工とまでは言わないまでも、かなり個性的な顔立ちをしていました。目が線で書いたように細く、唇が私の二倍はありそうなほど分厚く、鼻はワシの嘴をさらに立派にしたような形をしていました。顔が小さく手足が長く、身体の線も細かったので、雰囲気イケメンの枠に入っていた

のかもしれないけれど、正統派を好む私にしてみれば、昭和眼鏡の一風変わった風貌は、受け入れ難いものがありました。けれど、私は、生活を立て直すのに必死でした。Tとの別れから一年以上経っていて、私は、三十半ばに差しかろうとしていました。この機を逃したら、結婚の相手など現れず、シングルマザーとして苦しい生活を強いられると焦っていました。

公園で遊んでから昭和眼鏡の部屋を訪れた日のことでした。遊び疲れた娘が、すっと昼寝に入り、静かになった部屋で、昭和眼鏡に結婚したい旨を伝えました。昭和眼鏡は、細い目を見開くと、「僕でいいのですか？」と声を裏返して聞きました。「はい。結婚してください」私が言うと、昭和眼鏡は、組んでいた足を解いて、ソファの上に正座をし、「よろしくお願いします」と、三つ指をつけて深く頭を下げました。恋人の関係となつてから、三ヶ月になる冬の日の夕方で、窓の外では大きめの雪がしんしんと降り出していました。一ヶ月後、私たちは籍を入れました。挙式はせず、両家で食事をしただけの結婚でした。

娘が幼稚園に入りしばらくしてから、私は仕事を始めました。書店員、法律事務所の事務員、コンビニ店員など、いくつかアルバイトを転々としました。どこも一年と保たず、長くて半年ほどで辞めました。辞めた理由は、いくつかあります。たとえば、コンビニには、「私、サバサバしてるから」と自称する、四十代後半の女がいました。サバサバしていることは良いのですが、女はサバサバとダメ出しをし、そのダメ出しに一貫性がありませんでした。私は、この女のことを、鯖女さばおんなと陰で呼んでいました。鯖女は、「文句があるなら陰で言わないで本人に直接言えばいいのよ」と言いながら、人の陰口を、サバサバと私に語りました。また、本屋には、五十代半ばほどの妙に色っぽく小綺麗な女がいました。自分の見せ方をよくわかっていて、尻をツンと突き出し、その尻を振るようにブリブリと歩き、甘えたような声で接客をしました。まるで、昭和のぶりっ子のようなその女を、私は、鰯女ぶりおんなと名付けました。鰯女は、どういうわけか私のことが気に入らないようで、ことあるごとにいびるのでした。他の店員の指示に従って作業しているのに、「それは今やることじゃないわ」と、私のことすべてを否定するのです。そのうち、私は、鰯女のいる日はレジに立ったままほとんど何もせず、黙って時間を過ごすようになりました。鯖女だとか鰯女だとか名付けてい

た私自身が、鮪女まぐろおんなとなったのでした。

夫には、私が職を転々とする理由を、鯖女や鯺女に象徴される人間関係の煩わしさと説明していましたが、実はそれは嘘でした。本当の原因は、職場での異性関係にありました。

私は職場にいる男たちと、決まって男女の関係になりました。本屋では二十一歳の学生と恋仲になり、法律事務所では三十代前半の弁護士と関係を持ちました。コンビニでは中年の店長とことに及びました。そうした男たちとの関係が、仕事に悪い影響を及ぼし出すと、私は、逃げるように職を離れるのでした。

私のこの、性に対する奔放さのようなものは、病気なのかもしれません。夫は、家事にも子育てにも協力的で、決して怒らないし、声を荒げることもないし、本当にできた人なのです。それなのに、幸せであればある程、その幸せに怖さを感じ、まるで、その幸せを壊そうとするかのように他の男を引っ掛けるのです。

この頃、夫が私の度重なる浮気に気づいていたのかはわかりません。気づいていたもの、見て見ぬ振りをしていたのかもしれない。夫は、私を咎めることも問い詰めることもしませんでした。夫が決定的に私の浮気に気づき、それについて意見を述べたのは、夫と同じ大学の総務課で、パートとして働きだしてからのことでした。私は、そこで知り合った総務課の課長と、出会って間もなく恋に落ちました。

*

作家の K から電話があつたのは、娘が出て行って一ヶ月程経った日のことだった。

「特に用事があるというわけではないのですが、変わりはないですか」

人と会話をするのは、久しぶりのことだった。K の、低くてどっしりとした声が、懐かしく響いた。どういうわけかしんみりとした。心が沈むしんみりではなく、凧いだ海のようなしんみりだった。

私は、この一ヶ月で自分の身に起きたことを、順を追って K に話した。K は黙って聞き、私が話を終えると、静かに言った。

『『児童相談所虚偽通報』』というのを知ってますか？ 知らなかったら、検索してみてください。さい。あなたは、虐待をするような人間じゃないですよ。もし、自分で説明するのが困難なら、別れた旦那に間に入ってもらいなさい。大学教員の言うことだったら、信じてくれるで

しょうから。とにかく、あなたが虐待をするはずがない」

Kは、淡々と言った。

娘の父親であるTと知り合ったのは、TとKの対談イベントがきっかけだった。Kのファンだった私がイベントへ足を運び、対談の後のサイン会で、Kに連絡先を記した手紙を渡すと、その日のうちにKから連絡があった。私とKとは、一時期男女の仲のような関係にあったが、三度目に東京で会った翌朝、「もうこのような形で会うのはやめましょう」と、唐突に振られた。

Kに振られて間もなく、SNSを通じてTにメッセージを送った。Tは既婚者と聞いていたが、職業柄なのかフットワークが軽く、二、三度のやり取りで食事の約束を取り付けた。食事をした夜、流れて私とTは男女の仲となった。その後も、会って飲んで寝るを繰り返して、恋人のような関係になったのだが、それは、実のところ、Kに対する当てつけなのだった。Kの気持ちをなんとか自分に戻そうと思って、Tを利用していったのだ。Tは、楽しい陽の男で、何よりも顔立ちがとても端正だった。最初こそそうまいように使っていたものの、気づいた頃にはKに対する執着は薄れ、Tに対する愛情が深まっていた。

Kとは、別れてしばらくは音信が途絶えていたが、Tと私の噂を聞きつけたKの方から、SNSを通じてメッセージを送ってきた。そのときは、もう、Kに対する恋愛の情はなかったとはいえ、かつて好きになった男だから、やはり連絡が来たのは嬉しかった。Tとその妻とのことを相談に乗ってもらったり、やりとりは細々と続いた。Tと別れたときも、その後も、何かあればKにメールをするのが常となっていた。Tとの別れの経緯も話したし、夫がいながら浮気がやめられないことも明かした。私の身に起こったほとんどのことを、Kには話していた。Kは、私の話を聞かされたときに、「あなたは本当に困った人ですね。まあ、娘がいるのだからほどほどにしといたほうが良いとは思いますが」とアドバイスらしきものはしたが、説教をするようなことはなかった。

私の、病的な男癖の悪さや支離滅裂を知っているはずのKが私を庇ってくれている、その事実が、どうしても解せなかった。

「いいですか。児童相談所から逃げるのではなく、大学教員の元旦那に間に入ってもらい疑いを晴らすのですよ。優佳ちゃんのためでもあります。とにかく、疑いを晴らすのです」

Kは何度も繰り返した。私のいろいろを知っているKが、どうしてそこまでして私を信じるとか不思議に思って理由を尋ねると、Kはそっけない調子で言った。

「理由なんてないですよ。ただ、あなたはそういう人間じゃない、それだけです」
Kはそう言うと、「じゃあ、また」と唐突に電話を切った。

*

前略

娘が小学二年になる年の初春のことでした。付き合って一年ほどになる総務課の課長に、異動の辞令が出ました。異動先は、隣の県でした。その彼とは、パートを始めて間もなく開かれた飲み会をきっかけに、付き合い始めました。平日は、大学から少し離れた定食屋で一緒に昼食を食べ、休日は彼の運転で神社仏閣を回ったり、季節の花の開花に合わせて、県内各地を巡りました。夏には蛍を、秋には紅葉を、冬には凍った滝を見に行きました。

なんであれストレートにものを言う私に対し、彼は直接的な表現を好まず、婉曲的な物言いをしました。なので、最初のうちは波長が合わず、ギクシャクしていました。けれど、毎日顔を合わせる生活を一ヶ月も送ると、次第に呼吸が合ってきて、もともと笑いのツボが似通っていたこともあり、すっかりと打ち解けあったのでした。

互いに既婚者であるということも、関係の良好さに一役買っていたのだと思います。未来のない関係というものは、一見すると悲観を連想させるけれど、互いに責任を取る必要がない気楽さをもたらす利点もあるのです。私たちは、今、ここを楽しむという、心地よい関係を築いていました。彼が、一、二年で県外へ異動になることはわかっていて、それを承知での付き合いのはずでした。けれど、ある春の日に、彼から異動が決まったことを告げられると、私はそれに耐えられなかったのです。彼との楽しい日々が頭の中を巡り、悲しみで夜も眠れなくなるのでした。眠れぬ夜、私はひたすら彼との今後を考えました。そして私は、ある決断を下したのでした。

彼から異動を伝えられてから一週間後の夜、私は、彼の名を伏せつつ、夫にすべてを打ち明けました。彼の異動先の街に部屋を借りたいと思っていることも。私の不貞を知った夫は、ショックを受けたようだったけれど、取り乱すことなく静かに言いました。

「打ち明けてくれてありがとう。多佳子さんに僕以外の相手がいることは、薄々気づいていました。多佳子さんがその人ということで幸せなら、僕は構いません。優佳の面倒は僕が見るから、多佳子さんは君の道を歩んでください。今日から、僕たちは仮面夫婦です」

私は、彼の住む街に部屋を借りました。自宅と借り部屋とで過ごす比率は半々にしようと

思っていたものの、いざ二重生活が始まると、借り部屋で過ごす時間の方が長くなりました。私は、娘のことをほとんど忘れ、彼との生活を満喫しました。借り部屋から歩いて十五分ほどの場所には、海がありました。仕事を終えた彼と砂浜を歩き、沈みゆく夕日を眺め、日が沈むとスパーに寄り食材を買って、借り部屋へ帰り、夕飯を作りました。彼は別にアパートを借りていたのだけれど、私の借り部屋に帰宅し、そのまま泊まっていくことの方が多くなりました。食事を作る私の背後で、テレビを見ながら笑う彼の声が聞こえてきます。一緒に夕飯を食べ、一緒に風呂に入り、同じベッドで眠る私たちは、まるで新婚の夫婦のようでした。

夏休みを目前とした娘が、夕食をとりながら、「海に行きたいな」と言ったのは、七月のことでした。私はすぐさま、「だったら、ママの部屋に泊まればいいよ」と言いました。夫は、「それはいいアイデアだと思う」と言いました。思い返すと、他の男と生活をする部屋に娘を連れ込むというのは、ラブホテルに子を泊めるような、常識を逸した行為であると思うのだけれど、そのとき、私も夫も、そうしたことについて何の疑問も抱かず、日程や行程など、海へ行く話はトントンと決まっていたのでした。

小さな海岸で、平日の午前中だったこともあり、私と娘以外に人はいませんでした。ほとんどプライベートビーチのようなその海で、私と娘は自由に泳ぎ、互いを砂に埋め合い、貝殻を集めました。海の家へ行くと、集まってビールを飲んでいる漁師らしきおじさんたちが、サービスだと言って、その日の朝採れたという魚をさばいて出してくれました。なんの魚なのかはわからないけれど、おじさんたちが振る舞ってくれた刺身と焼き魚は、今まで食べた魚の中で一番というほど美味しく感じました。

日が水平線の向こうへ沈みかけると、どこからともなくウミネコの群れが集まってきました。おじさんの一人が、奥からトレイを持ってきました。トレイには生魚の切り身が盛りられています、おじさんは、群れに向かってぼーんぼーんと切り身を放ります。ウミネコたちは、その魚を空中でキャッチし、ゴクリと飲み込むように食べていきます。

「お嬢ちゃんもやってみるかい？」

おじさんは、隣でアイスバーを食べている娘に、トレイを差し出しました。人懐こくて邪気がなく、花が咲いたような笑顔を見せる娘は、すっかり海の家のおじさんと打ち解けていたのでした。おじさんたちからジュースやアイスを振舞われ（娘は魚よりもこちらの方が嬉しかったようです）、すっかりご機嫌な娘は、にっこり笑うと、小さな手で魚を掴んで砂浜へと放りました。娘の投げた魚は高さが足りず、ウミネコに届くことなく砂浜へ落ちてしま

いました。

「違う違う。こうやって下から上に放るんだよ。ほら、見ててみ？」

おじさんに餌のやり方を教わりながら、娘は、ウミネコに向けて魚を放っていました。

瓶ビールを飲みながらその様子を眺めていると、どうにも不思議な気持ちになるのです。私は娘の世話を放棄して、ときたま帰宅して遊んでやるだけの母親で、明らかに娘への

愛情は足りていないのに、娘はこんなにも順調に出来の良い子に育っているのです。

「あ！ 食べた！ ママ！ 見てた？ ウミネコさん、ゆうかの魚、食べてくれたよ！」

娘は、嬉しそうにこちらへやってくる、「ほら、ママもウミネコさんにごはんをあげてみようよ」魚の切り身の一つ、差し出しました。立ち上がり、縁まで行き、身を乗り出すようにして魚を放ると、ウミネコは勢いよく飛んできて、宙を舞う魚を咥えると大きく旋回し、再び戻ってきました。

「すごい、ママ！ ウミネコさん、一回で食べた！」

隣で、娘が小さな手をパチパチと叩きながら、はしゃいでいました。

その夜、娘が寝たのを確認して彼にメールをすると、彼は部屋を訪れました。私たちは、娘の寝息を聞きながら、静かにまぐわいました。

二泊三日の海の旅から戻った娘は、顔も身体も真っ黒にして、「パパ、すっごく楽しかったよ。ママ、来年もまた連れて行ってね！」と白い歯を見せました。

「もちろん。また行こうね」

そう答えたものの、来年は訪れませんでした。その夏から二ヶ月後、私は彼と別れ、借り部屋を引き払いました。娘に、「ママの部屋はもうないんだよ」というと、「あの部屋気に入ってたんだけどな。海、行きたかったな」娘は、少しの涙を流しました。

恋人と別れてから、どういう心の動きなのかわからないのだけれど、夫の様々を受け入れることができなくなりました。生理的な嫌悪のようでした。夫は、それを感じ取り、なるべく私と顔を合わせないように、帰宅の時間を遅くしたり出張を増やしたり、休日は娘と二人で出かけたりと工夫してくれるのだけれど、いったん感じてしまった嫌悪の感情は増していくばかりで、年が明けた二月、私は夫に離婚届を渡しました。夫は、「しばらく考えさせてほしい」と言い、離婚届を持って家を出て行きました。

一週間ほど経った日に、夫から手紙が届きました。離婚を了承するという旨の手紙でした。そこには、「多佳子さんが僕以外の男性に走ったのは、僕が不甲斐ないせいなのだから、多佳子さんは、あまり自分を責めないでください。」と書かれていました。「僕の中に憎しみはなく、あるのは空っぽのような寂しさだけです。」

封筒には、誓約書のようなものが同封されていて、娘が十八歳になるまで月に二十万の養育費を払うことや車は必要だろうから置いていくことなど、細かな取り決めが書かれていました。

「僕が養育費を払う義理はないとか、ひよつとしたら車を置いていかれるのも迷惑だ、そうしたことを思うかもしれません。ただ僕は、多佳子さんと優佳の幸せを願っているのです。ここに提示した条件では、多佳子さんたちの幸せに足りないかもしれません。ですが、これからできる限りのことはさせてほしいと思っています。最後に、月に一度でも半年に一度でもいいから、優佳に会わせてほしいと心から願っています。そのことについて、どうか、良い方向で考えてもらえると嬉しく思います。」

手紙の届いた日の夜、娘に、パパとママはお別れをしたから、これからは、ママと二人で暮らすことになるのだと話したら、娘はひどく取り乱しました。

「3がいいの。3って数が好きなの。3じゃなきやダメなの！」

娘は、顔を真っ赤にして涙を流し続けたけれど、パパに会えなくなるわけではないことや三人で会うこともあるかもしれないことなどを伝えると、顔を伏せ、肩を落として寝室へ入っていききました。

翌朝、娘は普段の娘に戻っていました。ぷっくりと腫れ上がった瞼で、「ママ、おはよう」と笑顔を見せました。娘は、今まで以上に優しく、正義感の強い、面倒見の良い子に成長していききました。娘に対して罪悪感を抱かなかったといえば嘘になるけれど、それでも、そのときの私は、娘は私を反面教師にしながらしっかりと育っていると疑わなかったし、時代も変わり家族の形も様々になっているのだと、自分の離婚を肯定していました。

けれど、今になって思うのです。やはり、この頃の出来事が、娘の精神の髄に、深くて暗い影を落としていったのではないか。おそらく、兎相にまつわるあれこれは、娘の我慢の、十数年越しの破裂なのです。

*

十月三日。この日は、娘の十三回目の誕生日だった。昼過ぎに思い立ち、ケーキを作ることにした。シャワーを浴び化粧をしてスーパーへ行き、洋ナシや黄桃、生クリームやミントなど、ケーキの材料を買った。

もともと、お菓子作りは好きだった。小学生の低学年の頃、母と一緒によくお菓子を作った。母は、蒸しパンやホットケーキや牛乳寒天が得意だったが、私のリクエストでアイスクリームにも挑戦してくれたし、型抜きクッキーも一緒に焼いてくれた。誕生日やクリスマスには、ケーキを作った。お腹の中の子の性別が女の子とわかったときは、一緒にお菓子作りができるのだと嬉しくなった。

娘は、図書館からレシピ本を借りてきて、付箋を貼って私に見せた。

「ママ、いっしょにこれ作りたいな！」

「いま忙しいから、また今度作ろうね」

「わかった！ またこんど、ぜったいだよ！」

結局、私が娘とお菓子作りをしたのは一度きりだった。小学六年のときに、ブラウニーを焼いた。クラスの女子全員で、バレンタインデーに手作りチョコを交換することになり、断るといじめられるからと娘に懇願され、渋々作ったのだった。どうして娘とお菓子作りをしなかったのか、理由を考えるのだがどうしてもわからない。とにかく、私は娘とお菓子作りをしなくて、それは、なりたいたい母親像とかけ離れた姿だった。

久しぶりに作った洋ナシと黄桃のケーキは、自分でも感心するくらいに美しい見栄えとなった。生クリームはさざ波のようにデコレートされ、薄切りにして放射状に交互に並べた洋ナシと黄桃が、淡い色のコントラストを描いている。その上にこんもりと盛られたミントの緑がアクセントとなっていて、シンプルで静かな佇まいにとっても満足した。

お皿に移したケーキを窓際に運び、スマートフォンで写真を撮っていると、私の脳裏に一つの疑問が浮かんだ。

「あれ？ 私、なんでケーキなんて作ったんだろう？ 誰も食べてくれる人なんかいないのに」

私は写真を撮るのをやめ、ケーキを持って台所へ行き、流しに捨てた。

この二ヶ月の間、一度も娘の顔を見ていなかった。

「娘さんとは会わないでください」

どれくらいの効力があるのか知らないまま、私は兎相の人の言いつけを守っていた。娘に会いたくないから会いに行かないのではなく、会いに行き娘に拒絶されるのが怖かった。

「何？ っていうか、誰？」

そんな言葉を投げられたらと想像すると、実家を訪れる勇気が湧かなかった。

娘は優しい子だからそんな言葉は吐かないし、ひよっとすると、私の迎えを待っているのではないか。調子の良い日は、そんな風に思うこともあった。

「ママ？ 何してるの？ 早く迎えにきて……」

娘の声が、頭の中で鳴り響く。車のキーを握って家を出て、実家に向けて車を走らせる。実家に近づくにつれ、自分がこれまでに娘へかけてきた言葉や自分の母への感情が蘇り、希望的な思いは頭から消えていく。途中の町で引き返し、誰もいない家に戻る。そんな日を何日も繰り返した。

*

前略

あなたは知っていると思うけれど、私は父親っ子でした。本の話で父と会話を弾ませる私をあなたは厭わしく思っていたようで、よく、「お前はお父さんに似て頭でっちな子ね」と貶しました。私は、本を読まないあなたを馬鹿にし、軽蔑していました。私にとって、好きで博識な父は絶対でした。

娘を寝かしつけた、ある夜のことでした。父とテレビを見ていたところ、何かの拍子で、学生時代に働いていた蕎麦屋のことを思い出しました。他の客の使ったザルは水洗いしただけで使い回すし、床に落としたワカメは拾って水でささっと洗い、火を通さずに使うのです。お盆の置き場がなくなると、埃が舞いゴミが散乱した床に立てて置き、店主は、携帯電話をいじった手を洗わずに包丁を握っていました。

「外食って、思いのほか衛生的じゃないんだよ」

私が話している間、父はテレビに目をやったままでした。そして、こちらを見ずに言いました。

「そんなに細かいことを言うなよ。あまり細かいことにこだわると、生きにくくなるだけだぞ。正義だって行き過ぎると国を滅ぼすって、誰か作家が書いていたぞ」

嘲るような呆れたような、とにかくあまり好ましくないような表情と口調でした。

「そうかもしれないね。でも、食中毒とかになってほしくないから、気をつけ……」

父を見て言うと、父は被せるように言いました。

「お前の言うようなことで食中毒になるんだったら、世の中、食中毒だらけじゃないか。昔は今よりもっと衛生環境がひどかったけど、こうやって人間は生き延びてるじゃないか」

相変わらず、視線はテレビにありました。父は、背もたれにもたれるでもなく、どちらかといえば前傾気味に座っているのだけれど、まるで胸を張っているようでした。別に威張るところじゃないのに、と思いました。

そもそも、私がしていたのは「衛生と蕎麦屋」の話なのに、「正義と国家」の話にすり替えられていました。「不衛生も行き過ぎると人類を滅ぼすことがあるかもね」と嫌みの一つでも言おうかと思っただけけど言わず、おやすみなさいの挨拶をして部屋を出ました。

すやすやと寝息を立てる娘の寝顔を見ながら、悲しいことだなあと思いました。父に話が伝わらなかったことはそれほど悲しくなくて（というのも、おそらく潔癖な私の言い分にも極端なところがあったと思うから）、父が、自分の視野が狭くなってしまったことに気づかないくらい老いてしまったことが悲しかったのです。あと、父の不遜な態度も。昔の父はこんなんじゃないやなかったのに、と思っただけけど、記憶を美化しているのかもしれない。果たしてどうだったのか、うまく思い出すことができませんでした。

寝巻きに着替え、娘の脇に横になり目を閉じました。眠ろうとするのだけれど、頭のなかでは父の言葉が渦を巻くように鳴っていて、うまく眠ることができませんでした。久しぶりに、あなたのことを思い出しました。

あなたは、私に自らの個人的なことをたくさん話しました。私の知らない人の名前をフルネームで出し、その人とあなたがどんな関係にあるのかとか、あなたがどのような人生を歩んできたのかとか、あなたの知り合いのうわさ話など、とにかくいろんなことを話しました。私はそれを聞き流しました。あなたはそのうち話すのをやめました。そして別の日に、「お前はお父さんに似て冷たい子だ」と言いました。数日するとまた、私を捕まえて個人的な話をしました。その繰り返しでした。

たぶんあなたは、父に話を聞いてもらえなくて寂しかったのだと、この夜、不意にわかったのです。この夜の私は、あなたの気持ちが妙に良くわかったような気になっていました。あなたは、自分の父親や母親にも話を聞いてもらえずに育って、ようやく話を聞いてくれるような人（父）と出会ったものの、実は、父は人の話が聞けない人だった、と結婚してから知

ったのだと思います。おそらくは。そのことに気づいた途端、あなたに申し訳ないことをしたと反省しました。もし、そういうことじゃないとしても、もつとちゃんと話を聞けばよかったと思ったのでした。

あなたと最後に話を交わしたのは、電話でした。あなたは精神が安定していて、どこにでもいそうな普通の母親として、落ち着いた様子で私に話をしてくれました。もうじき父の誕生日であること。私の出産を心待ちにしていること、名前は決めてあるのだからうけれど生まれてから教えてほしいこと。そして最後に、「孫を抱けるだなんて、親孝行をしてくれて本当にありがとう」と言いました。とても穏やかな声でした。私は、とても温かな気持ちになったのだけれど、それを素直に表現できず、「ふん」と返事をして電話を切ったのでした。

あなたは知らないかもしれませんが、遺影は、私とあなたのツーショット写真をトリミングして使いました。あなたがいなくなる一年ほど前、父と三人で東京のホテルに泊まったときに、父が撮ったものです。あの時、父は、分厚いカーテンを開け、椅子を並べ、私とあなたに座るように言いました。そして、自慢の一眼レフを構えて、数度、シャッターを切りました。背後に広がる夜景の前に写る私は不機嫌顔で、その隣、子供がひとり入るくらいの隙間をあけて写るあなたは、ほんの少し首を傾げ、少し気取って笑っています。気取ってはいるものの、とても穏やかな笑みでした。

*

昼下がり、ふっと眠気に襲われ、目覚めるとリビングのソファで横になっていた。日は落ちかけ、窓の外は群青色のグラデーションが広がっている。薄暗くなった部屋を見回すと、部屋からすっかり娘の気配が消えてしまったことに気づいた。愕然とした。起き上がり明かりを灯し、家中を回った。やはり娘の気配はなかった。書斎の棚に挿してあるアルバムを抜いて写真を見た。写真の中で満面の笑みを浮かべる娘は、まるで他人のようだった。娘の笑みは私に向けられたものではなく、不特定多数の人たちに向けられたもののように見えた。そこにいるのは、ほとんど雑誌の中で笑顔を作るモデルの少女のようだった。娘の生々しさを思い出そうとしても、霞がかかったようにうまく思い出せなかった。娘の声を再生しようとしても、水が詰まった耳で聞くような、ぼんやりとした音しか鳴らなかつた。娘と暮らしていたという実感は、もうなかつた。アルバムの写真やフィギュア

の置かれた娘の部屋だけが、「ここに中学生の女の子が暮らしていたらしい」という事実を、私に伝えた。

畑と田んぼとが広がる平らな地に、気まぐれに住宅が建っている。立派な樹木のある庭を持つ瓦屋根の屋敷があり、小ぢんまりとした真新しい洋風の家がある。振り向くと雄大な山脈が走っていて、遠くから踏み切りの警報音が聞こえる。地元の中学校の制服を着た生徒たちの流れと逆流するように、皆とは別の制服を着た少女が歩いていく。下校中の生徒たちの中には、少女とすれ違うときに軽く手を振ったり、言葉をかける者たちもいる。少女は、笑顔で手を振り返しながら一人で道を進んでいく。

山手とは反対側の遠方に、土手の上を走る道路が見える。まるでカーチェイスでもしているようなスピードで、車のライトが通り過ぎていく。堤防道路と呼ばれるこの道を走る車は、この道が一般道であることを忘れたかのように、高速道路並みの速度を出す。堤防道路にきちんとした歩道はなく、ただ白線が引かれているだけだ。ときどき、路側帯を歩く人を見かけるが、彼らの脇のすれすれを、速度を落とさずに走る車を見てみると、その道を歩くことは、ほとんど自殺行為のように思えた。少女は、堤防道路にたどり着く前に、道路のこちら側にそびえるケーキの箱のような形の体育館の脇を通り、職員玄関へと入っていく。

娘の暮らす村へ行ったのは、深く色づいた街路樹の木々の葉が落ち始めた頃だった。兎相の人から、娘が夕方から登校していることを伝えられていたし、帰りは父が車で迎えに行くことも知らされていた。村にある中学校は一つ。私の母校だ。私は、黒っぽい服に着替えてハンドルを握り、村へ車を走らせた。

娘の誕生日の翌々日の月曜日、およそ二ヶ月ぶりに娘を見た。娘の登校時刻が夕方の四時であることから逆算して、十五分ほど前の三時四十三分、畑に建つ納屋へ入り、薄く開けたドアから外の様子を伺っていた。

通学路を見渡せつつ娘から身を隠せるこの納屋は、前日の夜に下見をして見つけた。もとは農機具を置くために建てられたのであろう納戸の鍵は壊れていて、入ると何も置かれていなかった。成人男性が寝転んでもまだ余裕のあるくらいの奥行きがあり、十人乗りのエレベーターほどの広さがあった。懐中電灯で床を照らすと、高校生かあるいは早熟な中学生たちのものだろうか、コンドームの空袋がいくつも捨てられていた。納屋は、おそらく納屋としての役目を終え、今は子どもたちの簡易的な性交の場となっているのだろう。

納屋に入る瞬間、自分が不審者に見えないか、誰かに通報されないか心配で、心臓が激しく打った。納屋に入ってから、誰かにドアを開けられないかという不安がよぎり、呼吸が浅くなった。時間の流れがひどく遅いような気がして、スマートフォン時計を何度も見た。デジタルの示す数字は、まるで私を焦らすかのように、ちっとも変わらなかった。暑くないのに脇にじっとりとした汗が滲んだ。その場から逃げ出さなかったのは、娘の顔を一目見たいという思いの強さのためだった。

外を覗き始めてから五分が経ったとき、視界の左端に娘が現れた。夢でも見ているように現実感が乏しく、私の中には喜びも感動も、何も生まれなかった。この瞬間を求めてここにきたはずなのに、幸せも安堵も感じなかった。娘の小さくなっていく後ろ姿が消えるまで眺めたところで、納屋を出た。

ハンドルを握って家を目指していると、突然、恐怖を覚えた。自分がストーカーになってしまったような恐怖だった。私が娘にしたのは、つきまといと同様の行為だと思った。つきまといに中毒性があることは、本で読んで知っていた。このままつきまといを続け、それが兎相の人の知るところとなったら、私と娘との関係は完全に絶たれてしまうかもしれない。そんな恐怖でもあった。「大丈夫。今日だけ。今日だけだから」自らを安心させるように呟いた。

娘の顔を見られる悦びの誘惑は、理性に勝^{まさ}った。私は次の日も、村へ車を走らせた。娘は、昨日と同じ時間に同じ場所を通過し、二時間半後、中学校から出てくると父の車に乗り込んだ。父の車に乗り込む娘が街灯に照らし出されるのを、堤防道路の路肩に立って眺めた。車の風圧で車道へ引き込まれそうになる恐怖はあったが、それよりも、娘の笑顔が見られたのがこの日の収穫だった。

その夜、大型家電量販店に寄って小型の双眼鏡とズーム機能のついたカメラを買った。翌日、カメラと双眼鏡を車に乗せて家を出た。双眼鏡とカメラはウエストポーチにしまつて運び、納屋の薄く開けた扉の間隙から双眼鏡の片目を出して覗いた。娘の姿が見えたら双眼鏡をカメラに持ち替え、ズームを効かせてシャッターを切った。父が車を停めているのが職員用の駐車場であるとわかってからは、私もその駐車場に車を停めた。父や娘に気づかれないよう、他の車の陰になるような場所を選び駐車した。車の中から双眼鏡で職員玄関を覗き、娘が担任らしき男の教師と一緒に出てくると写真を撮った。父の車に向かう娘にレンズを向け、車に乗り込む娘を写した。何度か通ううちに、授業を受ける教室も判

明した。明かりが煌々と付けられていて丸見えだった。暗がりになれ、カメラを教室に向けてシャッターを切った。娘は、日替わりで別々の教師から指導を受けていた。国語や英語、数学といった教科を教わるだけではなく、彫刻刀で何かを掘ったり、絵を描いたり、習字も習っていた。白髪の男性の教師が、娘にギターを教えていた。娘も白髪の教師も、楽しそうに笑っていた。

撮った写真は、すべてプリントアウトして、寝室の壁に貼った。娘の気配の消えた真っ白な壁は、どんどんと写真で埋め尽くされていった。娘と何度もライブに足を運んだロックバンドの音楽を流しながら、市販の睡眠改善薬とウイスキーをちびりちびりと飲んだ。ベッドのヘッドボードに寄りかかって薬とお酒を飲んで壁の娘を眺めていると、娘と笑いあっていた日々が甦り、心が温かくなるようだった。二箱十二錠を飲み終える頃には、私は、眠りに落ちている。娘に囲まれながら夢とうつつとを揺蕩うこの時間は、一週間に一度だけ自分に許した贅沢だった。

*

前略

なるべく差別的でない人間でありたいと思っています。肉体や精神において、人目をひくような特徴を持った人に対してでも、平等に接するよう心がけています。平等というのは、特徴を持ったその人の性格だったり言動だったりを、彼らの特徴と結びつけないということです。どんな特徴を持った人であろうが、嫌なことを言われたら嫌だと訴えますし、凄いことは凄いと感嘆します。それを彼らに伝えます。伝えるのが面倒臭いときは、反応を返さなかつたりもします。彼らはたまたま目立つ特徴を持っているだけで、彼らの行いや性格のいちいちを、その特徴に結びつけるのはおかしいと思うのです。特徴、すなわち、障害があるうとなかろうと、合わない人とは合わないし気の合う人とは気が合います。良くないことは良くないし、凄いものは凄いのです。だるいときは怠けるし楽しいときは楽しみます。そういう態度でいようと心がけています。

けれど、こと、あなたや自分に対しては、どうしてもそれができないのです。精神の異常を抱えた救いようのない人間というのがいるとすれば、それは、あなたと私なのです。あなたは、病的なまでに楽しくなり病的なまでに落ち込み、病的に怒り病的に感情移入し

ます。私にも、その血は脈々と流れているのです。私は、そうした部分を見せないよう、自分を殺して過ごしていました。人との距離感にさえ気をつけていれば、それはうまくいきました。

Tや別れた夫とは距離が近くなりすぎ、結果、離れることとなりました。残されたのは、娘でした。娘が成長するにつれ、自分の思うように娘が動かないと、私の中を流れるあなたの血が、ふつふつと沸き上がってくるのでした。私は自分を抑えられず、娘に自らの病的な感情をぶつけました。あなたが私に対して自らの病的な感情をぶつけたように。こういうことは比較の問題ではないのだろうけれど、私に比べ、あなたの方がまだまともだったのだと思います。少なくとも、あなたは、児童相談所に通報されるようなことはなかったのだから。

あなたの血を引いている自分を恐ろしく感じています。その恐怖は今に始まったことではなく、おそらく、中学生の頃から感じていました。私は、生徒会の役員にもなり、成績は上位に位置し、先生たちからのウケもよく、いわゆる優等生だったけれど、そんな自分はどこか他人のようでした。頭の中では常に、黒くて暗い靄のようなものが渦を巻いていました。そういう黒くて暗い自分こそが、本当の自分であると知っていました。黒くて暗い靄のようなもの。それは、大人になったら自分もあなたのようにになるという恐怖でした。大人になっていくことを思うと、吐き気がして胃が重くなり、ぞわぞわとした震えが身体を覆いました。

反抗期。

この言葉で済まそうと思えばそうできるのかもしれないけれど、私の、あなたに対する憎悪や嫌悪の感情は、反抗期というには強すぎたように思います。たとえば、私はタイムマシンが登場することを切に願っていました。過去へ行き、私を生む前のあなたを殺すためです。この世に生まれさえしなければ、こんな風に苦々しくてどんよりとした思いを抱えずに済んだはず。そう心から信じていたのです。

妊娠がわかり、次第にお腹が膨らんでいくにつれ、私の中に不安が生じ始めました。生まれてくる娘をあなたに合わせることへの不安です。私は、あなたと娘を引き合わせたことはありませんでした。あなたの影響が娘に及び、娘があなたのようになることを案じたからです。だから、娘が生まれる前にあなたが自ら死を選び、それを全うしたと知ったとき、私は心からほっとしました。感謝の念すら覚えました。これで娘は救われた、と。それから、ようやく終わったと思ったのでした。これで、やっとあなたの血の呪縛から解放され

た。そう思ったのでした。けれど実際は、自分が母親となると決まったときから、私はほとんどあなたに近づいていたのです。そして、娘が小学校へ上がる頃には、私は、ほとんどあなたのようになっていました。あなたのような人間、すなわち、壊れ者です。

自分の思う通りにことが運ばないと無性に苛立ち、娘に当たりました。お前なんて死ぬばいとかお前なんか産まなければよかったとか、そうした言葉を吐き続けました。包丁を取り出して娘に渡したこともありましたが、自分のしていることが一線を超えているとわかってはいるのに、自分を抑えることができませんでした。平静な心でいるときは、娘が生まれてきてくれて良かったと心から嬉しく思い、通学中の小学生の列に車が突っ込み多数の子どもの命が奪われたという痛ましいニュースを見ると、娘と重ね合わせ悲しみでいっぱいになります。産まなければ良かったというのも死んでほしいというのも、本心ではないのです。口を吐いて出る言葉が本心でないことを、私は知っていました。けれど、娘にとって、私の言葉は、そのままママの本心なのでした。

娘は、私の変化を察すると、トイレへ逃げ込むようになりました。私は追いかけて、トイレのドア越しに呪詛の言葉をかけ続けました。気が済むと自室へ戻り、本を読み、音楽を聴きました。

ある夜のことでした。娘はトイレへ逃げました。

「隠れてないで、出てきなさいよ！」

叫ぶ私に、娘は震えた声で、「ママ、やめて。落ち着いて、ママ。元に戻って、ママ。お願いだから」と訴えます。ちっとも出てこない娘に、苛立ちは絶頂に達しました。拳でトイレのドアを叩きました。ドアを叩き破ろうと思ったのです。けれど、木製のドアは頑丈でした。手の節から血が流れだし、小指の脇が赤く腫れてきました。私は、玄関にある道具箱から金槌を持ってきて、ドアに打ちつけました。何度か叩くと、ドアが破れました。一枚の板だと思っていたドアは、一枚の板ではありませんでした。こぶし大の穴の向こうは空洞で、空洞の向こうにもう一枚の厚い板がありました。金槌をペンチに持ち替えて、破れた穴を広げていきました。ベリベリという鈍い音とともに、トイレの中から娘の叫びが聞こえてきました。もはや人の叫びと呼べないような、獣に近い声でした。なかなか破れないドアとどれくらい格闘していたでしょうか。ふと我に返り、自分は何をしているのだろうか、不思議な気持ちになりました。すっかり気分が冷め、台所へ戻って料理の続きに取り掛かりました。

こんな風に分裂する自分は、精神がおかしくなっているのだと自覚していました。精神科にかかる程に狂っていることもわかっていました。けれど、私がしたことは、精神科に予約の電話をかけることではなく、自らのすべての言動を、あなたのせいだと自分に言い聞かせることでした。私がこんな風になったのは、あなたの血が流れているから仕方がないのだ、と。あなたの子として生まれたことを、免罪符のようにしていたのでした。なんでもあなたのせいなのでした。そんな風に考えることは正しくないと知っているのに、そう思ってしまう自分の考えを改めることができないのでした。死者にすべてを擦りつける狡い人間、それが私でした。

*

兎相の人からの電話が鳴らなくなって、二ヶ月が経とうとしていた。ひよっとするとつきまといのことを知られてしまったのかと思ったが、それならそれで、苦情や注意勧告など何か言ってくるはずだから、知られてはいないのだと自分に言い聞かせていた。

深夜のことだった。違和感が目が覚めた。真つ暗な部屋のベッドに起き上がり、暗闇を見回した。何かが足りない。そう思った。違和感の正体は、何かの不在だった。しばらく何が足りないのか考えたがわからず、部屋を出た。リビングへ行き、台所へ行き、トイレへ行き、娘の部屋へ行った。そこで、足りないのは娘だと気づく。娘はシャワーを浴びているのだと、私は思う。浴室からシャワーの音が聞こえるからだ。実際には、シャワーなど流れていない。私は、安心して再び眠りに就いた。それからどのくらい経ったのか、わからない。外はまだ暗かったから、それほど時間は経っていなかったはずだ。私は、再び目を覚ました。そして、思い出す。ああ、不在の正体は娘だった。娘は出て行ったのだった、と。しばらく暗闇を見つめていたが、そのうち意識が途切れた。

次の日の夜。私は、告別式の式場にいた。式場には、学生服を着た中学生風の男女が沈痛な面持ちで下を向き、中には涙を流している子もいた。黒服の人は学生だけでなく、中年の男女もいたし、腰が曲がり杖をついた白髪の老女もいた。人たちは湧くように続々と現れ、広い式場に並べられたパイプ椅子を埋めていった。私は、その様子を入り口から眺めていた。「こんなにたくさんの方が集まるなんて、誰の葬儀なのだろう」

疑問に思い、前方の、白を基調としつつも華やかに彩られた祭壇へ歩を進めると、やがて、花に囲まれた遺影が見えてきた。

そこに写っていたのは、学生服を着てピースサインをしながら微笑む娘だった。

その瞬間、私は叫びを上げようとした。叫びという表現では足りないくらい、空気をぶん裂くような声を上げようとした。けれども、私は叫べなかった。声は喉に留まり、悲しみの塊は胸でつかえたままだった。私に向けて微笑む娘に、私はただ涙を流し続けるほかできなかつた。

そこで目覚めた。

枕は涙でびっしょりと濡れ、首と頭と胸元は汗にまみれていた。それが夢であるとすぐには理解することができず、しばらくの間、恐怖のような絶望のような不穏な感情が、身体の内芯にわたかまっていた。

納屋で待ち伏せても駐車場で張っても、娘が現れない。そんな日が続いていた。私は、あの悪夢は夢でなく現実なのではないかと思いはじめていた。実家に電話をして娘の様子を聞くことも考えたが、真実を伝えられるのが怖くて聞けなかった。実家の庭の陰からリビングを覗いたが、カーテンの向こうに娘の姿を見ることはなかった。毎日のように実家と納屋と駐車場を張り込んだが、娘は姿を見せなかった。私の脳内に、娘はすでに死んでしまったのではないか、皆は私にその事実を隠しているのではないかという疑念が広がっていった。

疑念はある日突然、確信に変わった。

娘は死んでしまったのだ。知らないのは私だけなのだ。

確信した次の瞬間、別れた夫にメールをしていた。

〈優佳は元気ですか〉

別れた夫から返信が来たのは、翌日の昼過ぎだった。

遅すぎる、と思った。

きつとこの一日の間に、別れた夫は必死で嘘を考えていたのだ。そう思った。

「Re：近況」と題したそのメールで、別れた夫は、こんな風を書いていた。

〈僕はいま、サバティカル期間のさなかにいます。と言っても、世の中を騒がせている疫病のせい、海外はおろか、県外へ出かけることもできず、自宅と大学図書館で研究をしているだけです。時間はあるので、週に一度ほど、多佳子さんの実家にお邪魔をして優佳と会っています。優佳は元気です。ただ、一方で元気でないのかもしれない。お腹の具合が悪いようです。夕方からの学校へも行けないほどに悪化しているようです。トイレ

から出られない日がほとんどで、少しでも何かを口にすると、腹痛に襲われるようです。優佳の身体は、何もかもを異物と見做し、外へ排出しようとしています。けれど、何も食べないというわけにもいきません。そんなわけで、食事はトイレで摂っているそうです。優佳は今、ほとんどの時間をトイレで過ごしています。心配だと思いますが、多佳子さんが気に病まないことを念じています。〳

別れた夫が書いていることは事実なのだろうと、頭ではわかっていた。けれども、私は、そのメールに書かれた文面を信じることができなかった。優佳に会えないストレスが、私から正常な思考を奪っていた。

私は、行き場のない怒りを、別れた夫にぶつけた。

〈だったら会わせてよ？ 私を優佳に会わせてよ！〉

別れた夫から、返信はなかった。

*

Kさん

電話ではうまく話せないと思うので手紙を書きました。と言っても、手紙で書いたところで、伝えたいことのうち、どのくらいが伝わるのか、それはわかりません。

伝えたいことは、大きく二つあります。一つは娘のこと。もう一つは、母のことです。二つに分かれているようで、実は一つのことなのかもしれません。この辺りも、きちんと整理してから筆をとるべきでした。けれど、書き始めることにします。手を動かさないで、私の頭からすべてが消えていくような気がするのです。

娘に宛てて手紙を書いたことがありました。一度だけではなく、何度も書きました。内容は、近況だったりこれからのことだったり、様々でした。長い文章になることもあれば、筆が進まず三行ほどで終えることもありました。そうして書いた手紙を投函することはありませんでした。すべて、その日のうちに破り捨てました。何故か？ 言葉を重ねるほど、娘に伝えたい思いが薄っぺらくなっていくような気がしたのです。私は、話し言葉よりも書き言葉を信じていました。話し言葉だと照れ臭くて言えないことや流されてしまいがちな心の機微も、書き言葉だとしっかりと伝えられると思っていました。言葉の薄っぺらさは、書き言葉によって解消されるものだと思っていました。けれど、それはおそら

く希望的な思い込みでしかなかったのです。というのも、書いている私自身が、私自身の言葉に冷めていったのです。

つまり、どういうことかといえ、手紙を書こうが何をしようが、私自身の薄っぺらさには変わらないということです。私の中には、照れ臭くて言えないようなことも心の機微も、そんなものは初めからなかったのです。生まれて初めて、娘への手紙という形で真剣に文章を書いてわかったのは、自分は浅はかな人間であるという事実でした。四十三年の間、自分自身と付き合ってきて、そうした事実には薄々気づいていたものの、こうして目の前に突きつけられると、途方に暮れるようでした。

だから言葉は無力なのです、という話がしたいのではないのです。

ある作家が、こんなようなことをどこかで書いていました。

〈言葉は人を殺すことができるけれど、そんな言葉と戦うことができるのもまた、言葉だけなのだ〉

この言葉を知った日から、どうしてもこの言葉が頭から離れないのです。何故なら、私自身、言葉で人を殺したことがあるからです。

私が殺したのは、母でした。

母は、娘が生まれるちょうど一ヶ月前に、実家の寝室で首をくくって死にました。母はもともと精神を病んでいて、医師である父が稼いだ金を使い果たしたと思いつき、その罪悪感から死んでいきました。けれど、実際は、家のお金はそれほど使い込まれていなかったのです。私が、母にそう思い込ませたのです。

母が湯水のようにお金を使うようになってから、父は別に口座を作り、ほとんどのお金を移動させていました。母が見ていたのは、父がお金を避難させた後の通帳だったので。私はそれを知っていて、母の耳元でこう囁いたのです。

「お母さんは家のお金を使い果たしてしまったんだよ。ねえ、どうするの？」

私が母の言葉を全く聞かなかったことも、母を死に追いやった一因かもしれません。私は悉く、母の言葉を聞き流しました。空返事を繰り返し、返事をしないこともありました。大学時代に家を出ていたときは、電話の向こうで滔々と語る母を遮るように受話器を置き、通話を終了したことが幾度となくありました。別の日には、受話器を電話の隣に置き通話中にそのまま出かけたこともありました。私はあらゆる方法で、母との会話を拒みました。それでも母は、私と話そうとしました。母が私との対話を求めれば求めるほど、私の態度は硬化していきました。

母に対する私の言葉の様々により、母は死んだ。そう思っています。自意識過剰と思われるかもしれないけれど、娘の母になってわかったのは、娘に突き放されることがどれほど辛いかということでした。

連れ合いを亡くし、悲しみに暮れて、げっそりとやせ細った父を目の前にすると、こんな私でも罪悪を感じました。できることならば、母を殺してしまったことを償いたいと思いました。どうすれば、償えるのか。何が償いになるのか。考えるのですが、なかなか答えは出ませんでした。

母がこの世を去ってからちょうど一ヶ月後、母の月命日に娘が生まれたとき、父は新しい命の誕生を喜びました。目にはうつつすらと涙が滲んでいたのを覚えています。父は、仕事を終えると病室にやってきて、目尻を垂らしながら娘の顔を眺めました。その様子を眺めているうちに、娘に私と同じ思いをさせないことが償いになるのではないかと思うようになりました。娘の前で真つ当な人間であり続けることが、母を死なせてしまったことに對する償いになるのではないか。そう思ったのです。私は可能な限りの愛情をかけて娘を育てようと、病室の片隅で心に決めたのでした。

けれど、やはり駄目でした。愛情を注ぐとすればするほど苛立ち、その苛立ちは暴言となり、娘から安穩を奪っていったのです。

物心がついたときから、どのタイミングでどんなことを言えばその人に大きなダメージを与えられるかがわかりました。頭で考えるのではなく、感覚としてわかりました。この人にこんな風に言えば傷つくだろうな、と。そういう、攻撃的な自分を見せないように気をつけていたけれど、何かの拍子でそれは表に出してしまうのでした。たとえば、高校の入学式は母と二人で電車に乗って出席したのですが、駅に向かう道を歩く母の姿があまりに貧相だったから、「貧乏くさい。一緒に歩くのが恥ずかしい」と伝えたことがありました。母は、「そうね。ごめんね」と謝りました。入学式には出たものの、その日、帰宅した母は精神の具合を崩し、数週間ほど床に臥していました。

母をそこまでして死なせたかったのは、やはり、自分が母のようになりたくなかったからだと思います。縛られていたのです。母と私は別の人間であることはわかっています。私が母のようになるはずがないのです。それでも私は、母のように年をとることを恐れませんでした。

母方の祖母には、高校二年の夏に亡くなるまで、何度か会いました。小学生の頃は、毎年夏になると一家で母の田舎へ帰省して、一緒に精霊馬を作ったり迎え火を焚きました。おはぎの作り方を教えてくれる祖母は、言葉遣いこそ汚いけれど、とても優しくったのを覚えていてます。母との会話は極端に少なかったものの、これと違って不機嫌になることはありませんでした。気になったのは、祖父への態度でした。祖父は耳が遠くて腰が曲がっていたのだけれど、祖母は動きの遅い祖父を蹴り飛ばして急かしたり、祖父の耳元で鼓膜が破れてもおかしくない程の大声で怒鳴ったりしていました。ほとんど、家畜に対する扱いのようでした。祖父の目の前で、私たちに祖父の悪口を言って聞かせたこともありました。祖父はそれが聞こえないのか、悪口を言われているというのに、惚けたようにニコニコと笑っていました。子どもながらに不気味を感じる光景でした。

母のようになるのが嫌だったら、自分で自分を消してしまえばよいのではないかと思われるかもしれません。けれど、私は、自殺を考えたことはありませんでした。母が死ねば、私は血の呪縛から解放されると思っていました。だから、母が無事に死んだときは、心からほっとしたのです。母は六十三歳で死んだのだけれど、その年齢さえクリアすれば、つまり自分が六十三歳を過ぎれば、私は自らのうちに母の影を見なくなると思っていました。今年、私は四十三歳になりました。母の年齢に近づくとつれ、私の中の母は、存在を大きくすることはあっても消える気配はありません。私は間違っていたのでしょうか。

もしかすると、私は、同じようにして娘も殺そうとしていたのかもしれませんが。自覚こそなかったものの、私は言葉によって娘を死に追いやろうとしていたのかもしれませんが。あのまま娘が私と暮らしていたら、娘は、自ら命を絶っていたでしょう。そんなことは望んでいないけれど、実際に私がしていたことは、そういうことでした。だから、娘があの日、どんな形であれ私から逃れたのは、娘にとっても私にとっても幸運なことだったのだと思います。

駄目ですね。自分で書いていても、何を伝えたいのかさっぱりわからないような文章となってしまうました。やはり、筆をとるのはもう少しじっくりと考えてからにするべきだったかもしれません。

まとまりのない文章となってしまう、すみません。

この辺で失礼します。

返信は、要りません。

*

前略

T が出て行き、別れた夫と出会う前。そんな合間の頃のことです。父が、私にあなたの遺品の整理をしてくれないかと頼んできました。

大量の服やバッグを売り、宝石は親戚に配りました。あなたがデパートで買い漁った洋服の数々は、一着数十円、よくても数百円しか売れず、ダンボール箱にして数十箱はあったであろう洋服やバッグは、一万円にもなりませんでした。

大型の美容器具（首から下の身体がすっぽりと入る椅子のような、あの葉草サウナです）の処理に困った父は、購入元のマッサージ店に電話をかけるよう、私に頼みました。うどん屋や美容マッサージ店や不動産業や居酒屋や美容室など、様々な分野を多角経営をしているその一族に、あなたは入り浸っていました。私もうどん屋に連れられていったことが、何度かありました。胡散臭い人たちだと思い、あなたはいいかモにされているだけだという印象を受けました。けれど、そんなことを言うと、あなたは気分を害して精神を崩すので、黙っていました。

美容マッサージ店に電話をかけ、あなたが急逝したことを告げて美容器具返却の相談を持ちかけると、電話の男は面倒くさそうに、「そういうこと言われても買ったもんはそっちで処分してもらわないと困るんすよね。ってことでいいっすか」と言い、ガチャリと電話を切りました。お悔やみの言葉はもちろん、あなたについての言及は何ひとつありませんでした。このときばかりは、悔しさがこみ上げました。あなたは、このマッサージ店のことを、「本当によくしてくれてるの。とっても親身になってお話を聞いてくださるのよ。今時、こんなにしっかりとした若者は珍しいわ。本当に感心しちゃうわ」と褒めていました。それは、あなたが男にとってお金をつき込む人だったからなのだと、電話で確信しました。あなたに同情する気持ちはないけれど、あなたに対して男たち一族が抱いていたであろう感情——ほら、諭吉が来たぞ——を思うと、死ぬべきは、あなたではなく男たち一族のような人間なのだ、怒りで身体が震えました。

それから数日経った日に、あなたが懇意にしていたバイオリン奏者から、リサイタルの案

内ハガキが届きました。あなたがチケットをまとめて買取り、知人に無料で配って席を埋めていた、あのバイオリン奏者です。父に代わって電話をかけると、代理人のような女が出ました。あなたが亡くなった旨を伝えると、「それはご愁傷様でした。来月のリサイタル、よろしければご遺族で聴きにいらしてください」と言われました。感情のこもらない、事務的なもの言いに、胸が苦しくなりました。リサイタルに誘われたことを父に伝えると、父は、「僕はそういうの苦手だから、お前、優佳と行ってきてくれよ。花の一つでも買って行ってな」と、私にチケット代と花のお金を渡しました。

当日、娘を抱いて会場を訪れると、会場の最後尾に設置された、防音の家族室のような部屋に通されました。案内係の女は、小さなお子様がいらっしやるなら事前に……、と言葉を濁すように言いました。娘を膝に乗せ、スピーカー越しに演奏を聴きました。ガラスの向こうに見える客席は、ほとんどが空席でした。一時間ほどの演奏が終わってから、ロビーに立ち、客を見送るバイオリン奏者のもとへ行きました。「母が生前お世話になりました」と頭を下げて花を渡すと、深紅のドレスを着て茶色い髪を巻いたバイオリン奏者は、「どうも」と当たり前のように花を受け取りました。女は、私に抱かれる娘のことを聞くわけでもなく、母の話をするでもなく、終始仏頂面でした。お悔やみの言葉も、通り一遍のものでした。話す言葉が見当たらず困っていると、腕の中の娘がぐずりだしたので、「これからのご活躍をお祈りしています」と言い残し、その場を後にしました。

遺品の整理をしながら、私は、あなたの過去が出てくることを覚悟していました。たとえば、結婚前の恋人との手紙だったり写真だったり、あるいは結婚してからのもの、つまり、不倫の類の証拠のようなものだったりが出てくるのではないかと思っていました。父が私に遺品整理を託したのも、そうしたことを恐れていたのではないかと勘ぐってもしました。たとえそういう類のものが出てきたとしても、私はきつと驚かないと確信していました。病的なまでに性にだらしない私を産んだのだから、あなたもまた、性に関して病的なふしだらを持っていてもおかしくないと思っていました。もし、あなたの病的な性のふしだらを見つけたとき、私が傷ついたりショックを受けるのは、ひどく滑稽なことだと思っていました。

そんな風に考えていた私を、あなたは、見事なまでに裏切りました。あなたの遺品をいくら掘り返しても、病的に性的な類のものは、一切出てこないのです。敢えて、「恋に関する何か」に分類できるものといえば、若き日の父があなたに宛てて書いた手紙の束くらいなものでした。おそらくそれは、恋文なのだと思います。色褪せた封筒には、父の几帳面な文

字で、あなたの名が記されていました。桐の箱に入ったその封筒の束を、私は開けませんでした。若き日の父とあなたの様々を知ることが、してはいけない気がしたのでした。

遺品整理がほとんど終わりかけた頃、一枚のハガキを見つけました。それは、クローゼットの下の引き出しの服の下、一番奥に隠れるように置かれていました。いわさきちひろの絵葉書で、郵便番号欄の印刷された面には、威勢の良い字が書かれていました。

それは、私に宛てて書かれたものでした。

◎ 多佳子様へ

昔も今も多佳子ちゃんは可愛いね

母に語ってくれるお前は正直でうれしい

でも大人になるという事はむずかしいと思うけど 意外と簡単

素直ということだよ。

ひみつ

心から素直になれば良いのです

無心に!!

童心に!!

ハガキには、威勢のいい字で日付も記されていました。あなたがこの世を去る三日前の日付でした。美容器具の葉草の匂いが染み付いていました。晩年のあなたの匂いです。

実家を出て今の家に引っ越してから、文机の引き出しの奥にしまったまま一度も出したことのないハガキを、今日、久しぶりに出してみました。十数年振りのそのハガキからはあなたの匂いは消えていたけれど、いわさきちひろの絵とあなたの文字は色褪せることなく、当時のままを残していました。

*

榎本多佳子さま

言葉を生業としている私がこのようなことを言うと戸惑ってしまうかもしれないが、私は言葉をそこまで信じていないし過度な期待もしていないのですよ。言葉に対して誠実であるうと心掛けてはいるが、いったん自分から離れた言葉については相手に委ねることにしているのだよ。

ついでに言えば、想像力という言葉もどうも好きになれないのですよ。想像はモノを書くには役立つが、相手を思いやるだとか相手のためだとか、相手を定めた瞬間からおかしな方向へ走り出すものだと思うのだよ。いくら想像を働かせるって言ったって、所詮、出処は自分の頭なわけでしょう？ 相手がどう思うかだとか、そういうことは相手に任せておくに越したことはないと思うのだよ。そんな風に思うのは、私の想像が暴走してるのだろうかね。

追伸

悪いことをしたと思ったら、謝るんだよ。想像だとか血だとか云々言うよりもまず、謝るんだよ。死んだ相手には謝れないが、生きてる人間には謝れるでしょう。

K

*

娘がいなくなってから、初めての春が来た。窓を開け放つと、陽だまりの匂いを風が運んでくる。暖かな陽を背中に受けながら、優佳に宛てて手紙を書いた。

メンタルクリニックの予約を取ったこと。診察までは二ヶ月待たなければならぬけれど、先生が穏やかでスタッフも親身になってくれると評判のクリニックであること。そこでは、偽りなくすべてを話そうと思っていること。そう簡単ではないかもしれないけれど、私の精神が安定したらもう一度、優佳と一緒に暮らしたいと思っていること。それから、私が優佳にしてきたことを謝罪した。書き終えた便箋一枚の手紙を封筒に入れ、封をした。封筒には実家の住所と優佳の名を記し、近くの郵便局のポストに投函した。

手紙を出してから四日後の昼下がり、チャイムが鳴った。玄関を開けると、兎相の人が二人、立っていた。兎相の女は、バッグから封筒を取り出すと、「優佳さんからです」と差し出した。

拒絶の気持ちが書かれていたらという恐怖よりも、優佳の、決して上手とは言えない文字に、すぐにでも読みたい気持ちが止められなかった。

「いま読んでいいでしょうか？」尋ねると、「お母さんさえよければ、どうぞ」兎相の女は、玄関の三和土に立ったままゆっくりと首を縦に振った。

ママへ

久しぶりだね、ママ。

私は、おじいちゃんの家で悠々自適な生活を送ってるよ。

お腹は治らなくてトイレにこもる毎日だけど、一階のトイレは私専用のトイレにしてくれて、おじいちゃんが、〈優佳専用です。ご利用の方は二階のトイレへ〉っていう張り紙まで作ってくれたんだよ。しかも、毛筆。

おじいちゃんは、おばあちゃん（ママのお母さんだよ）のことが大好きだったんだよ。だから、おばあちゃんが死んじゃったときは本当に悲しくて、生きる意味がなくなっちゃって、辛かったんだよ。

「でも、一ヶ月後にお前が生まれてきてくれて、おじいちゃんは、再び生きる力を得たんだよ。生まれてきてくれたお前にも感謝してるし、お前を産んでくれた多佳子にも感謝してるんだよ。お前の母さんはあんなんだけど、ダメな人間じゃないからな。おじいちゃんは、お前の味方でもあるけど、お前の母さんの味方でもあるんだぞ」

これはおじいちゃんが言ってた言葉。ほら、私は物覚えがいいの、ママなら知ってるよね？ おじいちゃん、本当にこのまんま言ってたんだよ。

「それ、ママに直接伝えた？」って聞いたら、おじいちゃん、「いや、お前にしか言えないな」って照れたような顔をしてたよ。

いまはまだ会えないけど（私はとっても会いたいんだけど、精神科の先生がダメって言っただよ）、いつかまた、ママと一緒に暮らしたいな。一緒にお菓子作ったりお料理も教えてね。

最後に、大事なことを伝えないとんだけど、ちょっと照れちゃうな。

けど、やっぱり言わないとわかんないよね。だって、ママってネガティブなんでもん。

ママ、もつと自分を認めていいと思うよ？ 子どもにこんなこと言われるなんて、ママは本当に子どもだな！

えっと、伝えたいことっていうのはね……。

ママ、傷つけちゃってごめんね。

大好きだよ！

優佳

私は児相の人がいるのも忘れ、泣いた。

「お母さん、実は、今日はお話をするつもりはないんです。はい。ただ、お手紙を早くお渡ししたくて、こうして突然の訪問となってしまうました。申し訳ありませんでした。私たちはこれで失礼しますね」

そう言うと、児相の人は玄関の扉を押し、出ていった。私は、通りの見渡せるリビングへ移り、児相の人を見送った。小さくなっていく児相の人の背中に、一礼をする。道の端に、オオイヌノフグリが咲いていた。

了

【参考文献】高橋源一郎『「ことば」に殺される前に』（河出新書）